

お気楽
精神科医の
頑張りな
人生のスヌメ

第十六話

ボケとワツツの関係

福島 淳 イラスト・福島マルゲリータ

おまえは遊んでるぞ
少しはマシメに
働け!!

だって
仕事人生は
危険なんだから



視されることさえある。A氏はプライドが丸つぶれの状態となった。

その頃からであった。ほとんど毎日のように出歩いていたのに、ボートと一日中テニスの前で過ごすようになったのだ。もちろん、それほど興味もないのに参加していたゲートボールやカラオケはとんとこ無沙汰。たまには近所に出かけることもあるのだが、一服してくるべらいのことで、家の中では何もしようとしてない。見かねた奥さんは子供や孫を誘って一緒に外出するのだが、A氏は楽しそうにはしているものの、会話が続きず、ついこの間のことを忘れたりする。これはボケたに違いないと思つた奥さんは、急ぎよ病院へ受診させようと決心したのだ。

夫婦そろつての受診。A氏は無精ひげを伸ばし、ボサボサ頭でぼんやりとしている。奥さんによると、いつもはもっとだらしない格好をしていると言つ。本人は、ボケてしまつて妻にも迷惑かけ通しです などと答える。しかし、一見ボケた様に見えるA氏を診て、医師はワツツではないかと疑つた。ここで、なぜワツツに見えたのかを考えてみよう。

ワツツについては前号で説明したが、簡単に言つてしまえば、エネルギーの低下といえる。体全体のエネルギーが下がつてしまつたわけだから、心身共に動きが鈍くなる。思考力も鈍るわけだから、的確な対応ができず一見ボケたように見えるのである。

さらに、ボケに見えるワツツと、痴呆ボケ(とを、色々な視点から比べてみる。その始まり方は、両者とも環境の変化をきっかけにすることは多い。しかし、年をと

ている。根治療法がなく、個々の症状に対するの対症療法(症状に対する治療法、原因に対する治療法ではない)しかないのが現状である。

ボケになる病気といつと、まず老年痴呆が頭に浮かぶことだろう。この老年痴呆とは、老年期(ふつと65歳以上を指す)に好発する、脳細胞の萎縮と消失を特徴とする脳の病気である。アルツハイマーという名前を聞いたことがあるだろうが、正確には、アルツハイマー型老年痴呆という。初期には物覚えが悪くなるといった症状が始まる。ところが、徐々に時間や場所の見当がつかなくなつたり、日常生活での簡単な判断にも支障をきたすようになる。徘徊所かまわずウロウロしたり、興奮状態になることもあるが、最後には頭の働きが乏しくなり、対人交流がなくなつてしまつといわれ

後、生活を考えなくてはいけなくなつた。一方、専業主婦であつた奥さんは、日頃のお付き合いから社交の場は広くなつており、旅行、趣味の会と忙しい日々を送つていた。子供もそれぞれの家庭を持ち、時々孫を連れて帰ってくるだけである。そこで、ご主人もこれではいけないと思ひ、あちこちに顔を出してみた。ゲートボール、カラオケ、元々知らない分野でも積極的にチャレンジする性格が幸いし、とにかくまずはやってみるのだ。しかし、どこに顔を出しても、心の奥底でもしやと願つていたように、重宝がられることもなく、むしろたびたび無

とところで、どこでボケとワツツが関係してくるのであるか。次のようなケースを考えてみよう。A氏は、長年にわたり自分の専門分野で先頭に立つて働いてきた。60歳の定年でいったん現役を退いたものの、半間の休養を経て関連会社に就職し、現役に復帰する。肩書きや収入では下がつたものの、後輩を指導するという仕事は十分にやりがいがある。しかし、その仕事からも65歳で引退することとなり、改めて、今

ってから全くきつかけなく発症するのは、
痴呆の方が多いだろう。

次はボケの程度である。痴呆は全般的なボケを示すのに対して、ウツの場合は部分的なことが多い。つまり、しっかりしたところがはつきり分かる時は、ウツを疑うべきなのだ。

また、ボケたことを認めない、本人にも分からないのが痴呆で、ウツの人はボケていることを自覚している。その上、周りの人に迷惑をかけている、申し訳ないと自責感をも持っているのである。逆に、痴呆の人は、自責感がなく、また真剣味がないと見える。

分からないことを聞かれた時に、すぐにピンぼけのトンチンカンな返事をするのが痴呆で、ウツの場合は正直に分からないと答える。考えるのがしんどい、つらいのに対して、痴呆の人は考えるのを怠けていると言えらる。

具体的に、A氏について考えてみよう。退職をきつかけに発症しているが、これはウツでも痴呆でもあり得る話だ。自分の役割や立場が、退職後の社会の中で認められなかつた失望体験も、大きなきつかけになっており、これはウツを疑うべき大きなポイントだろう。さらに、自分のボケ症状に自覚を持ち、自分が悪いと考えているところが決め手と言える。

彼のような症状を示す人には、もちろん抗うつ薬による薬物治療が適応となる。しかし、それだけではすつきり行かないことが多い。いくら脳内神経伝達物質のバランスを整えようとしても、現実の生活がそ

の人にとって無味乾燥な、楽しくない生活だつたらどうだろうか。居場所のない生活の中で生き生きとした人生など送れないのだ。

このような人の場合は、自分の専門的な知識を役立てるような、たとえばボランティアでもいい、やりがいのある仕事、自分の居場所を見つけてくれることが、大いに意義のあることだ。一種の作業療法(個人の特性に応じた活動を通じて個々の価値観やアイデンティティーを回復または新たに獲得する治療法)になつていとも言えるだろう。薬物療法と相まっていい結果を出してくれるに違いない。年をとつてもこのようにならないためには老後の生活についてあらかじめ計画を立てておくことが重要な予防策となる。“仕事こそ人生”という生活をおくるのは、非常に危険なことぐらいに思つていた方がよいかも知れない。

最近、電車の中で元気な老人の集団に出会うことが多い。何かの同好会といった雰囲気なのだが、とにかく、楽しそうで生き生きとしている。若い人の方が躊躇うに迫いやられているような気がするほどだ。そして、圧倒的に女性の方が多いのが不思議である。もちろん、女性の方が平均寿命が長いことから、同じ年齢で考えると男性より女性の方が元気なはずだが、その想像を超えている。とすると、就労率の男女差を考えて、退職というハードルがいかに高いものかということになる。今後、女性の社会進出が多くなつてくる中で、何十年か先の老人の元気度はどういふ風になるのか、ちょっと想像してみよう。

